

ホトトギス 昭和二十四年三月二十八日 運轉者特別授受記録第六二七号
平成二十七年九月一日発行(第四百十八卷第九号)

ホトトギス

九月号



俳句随想〔三百九十九〕

汀子

今年は何かと仕事の依頼が入って来て、それも講演の依頼が多い。相変わらず恒例の仕事があり、それにプラスすることになるので大変である。仕事と言えば今までも努力しなければ出来ないものばかり、遣り終えるとはつとずするが、自分の中に何かが残るような満足感があるので引き受けてしまうのである。残り少ない人生ではあるが、生涯勉強なのかと思う。準備が出来る嬉しくなる。

さて、投句用紙の裏の通信欄にお便りを頂いて楽しく拝見している。「毎年四月五月には学校検診があります。初々しい一年生からお兄さんお姉さんのなった六年生まで数百人の成長を目の当りにして自分の刺激とじています」これはご職業が医師である。俳句も心情の深い句が多く、いつも楽しみな作品である。又、私の俳句随想を読んで参考になると言って下さる方も多く、私も自分に言い聞かせるような積もりで書くことにしている。

何回書かせて頂いても見て頂けない方もある。「予後は病後のことではないのであるが病後として使う方がある」「春霞」「春耕」「春彼岸」がまだ使われている。春を付けないでそれぞれの季題を使つて欲しい。「何ごともなかりし如く……」という上五七に季題を配した句がまだ必ず出て来る。短い詩である俳句なので、類想句が出てくるのはあるかも知れないが、自分の発想を大事にして、新鮮な俳句を拝見したいものである。今月の「句会と講演の会」は「汀子に聞く」である。皆様の質問を楽しみにしている。

句日記 汀子

平成二十六年九月二日 ロイヤル俳壇

結局は夜なべそのまま寝ることに近づいて遠ざかる台風のこと秋草の野の一日の暮れゆくに夜なべには明日があるといふことに名を問はれただ秋草と応へけり

九月二日 紀陽展オープンテ

露けしや永久にも若き日のありて思ひ出は永久に消えざる秋の草遠き日を近づけ秋の 紀陽展

九月五日 アネモネ俳句会

露ふむ朝の 大気を身ほとりに日が昇り来し 草原の露の綺羅いく度も夜露に濡れて戻りけり月に 雲 雲月に待つ 心はも抱かれし花束は露置かざりし忘れぬし月に守られたる家路

九月六日 若屋ホトギス会

萩育て一書上木されしこと鍵かけてをれば虫の音自ら

九月七日 下萌句会

露踏んで旅立つ夜明なりしかな全体に見れば花野でありしかな月白に 帰宅の門の 明るさよ

九月九日 大阪倶楽部

満月といふほかはなき今宵かな花野の端に名月沈みゆく忌日竜胆の色とのへし忌日かな霧抜けて霧抜けて山深くなる吸はれゆく霧に大地の動きけり

九月九日 綿葉俳句会

かく晴れし忌日は知らず露けしや大方は露に濡れつつ育つもの

道の辺のはみ出す山路秋の草明るさも暗さも山路露葎秋草の高さ競ひて倒れけり

九月十一日 清交社

災害の及ぶ蝦夷地の秋出水空荒るの今宵立待月とこそ鈴虫の宿と呼ばれしこともあり敬老の日とて人事なりしこと健在や 敬老の日の 三姉妹

九月十日 工業倶楽部

気のつけば秋の夜の更けをりしこと撫子も庭の一劃なせりけりこれよりはは余白の時間秋の夜

九月十三日 日本伝統俳句協会全国俳句大会

みそなはせ給へ露けき島夜明島一つ一つ露けき過去抱き太陽の恵み露けき島々に

九月十六日 有恒俳句会

刻々の夜明露けき松島に冷やかや被災の跡を巡る旅海風ぎて露の松島夜明け来し冷やかや手つかぬままの被災の地雁渡り来し被災の地忘れずに甦る良夜に 偲ぶ人ありてよく晴れて良夜の旅路いざなへる

九月十六日 無名会

旅終へて旅のつづきのやうな秋遠やかな旅ふりかへる家居かな速き旅終へ近き旅露けしや忘れものして来しこともうそ寒し肩の荷を下ろしたるより秋冷に霧晴れて大地に朝の来てをりし

九月十七日 夏潮句会

まだ旅のつづきのやうな秋の晴

待つといふ刻々露の時間あり油点草咲くまで待てぬ庭案内松島の旅路語らん 秋の虹見慣れぬてその名問はるる油点草遅れ着く露の伝言受けしこと

九月十九日 時雨句会

松虫草三瓶の旅を輝かす今の世の稲刈機械まかせとも対談は芭蕉の話し草の規犯る野の花と言ひし松虫草の隠れ野の起伏松虫草の見え隠れみちのくの旅はや遠し今日子規忌旅のこと語る子規忌でありしかな

九月二十日 句会と講演の会

墓参よりはじまる一日なりしかな子規忌てふ学ぶ心を立て直す鶏頭の花供華として改る月細し二十三日は家居して

九月二十五日 きざらぎ会

台風の崩れし雲を抜けて旅台風の名残の空へ向け離陸旅終へて次の旅待つ秋の雨東京は家居のつづき夕月夜

九月二十七日 北信越ホトギス俳句会前日句会

白樺に秋風渡りはじめけり高原の心 芒を渡りけり禁酒解く 逡巡秋の 見学に噴火せし山のつづきの秋の空

九月二十八日 北信越ホトギス同人会

気にかかる噴火の山も旅の秋旅疲れか芒に心置くととき旅の晴

廣太郎句帳

廣太郎

平成二十六年九月一日 夢三三全園俳句大会

大花野一花一花に忌心を
句やかに清かに司会秋裕

濡れ色に覚めゆく花野忌の朝

九月三日 サントリー情報誌出句
大都会ビルの狭間に秋惜む

九月四日 カトリック新聞選考時

アンジェラス鳴りて落ち初む桐一葉

九月四日 蕉心会

水の星水の都の水の秋

命三つ四つ五つ六つ秋の蟬

黒々と二百十日の水面かな

震災忌今に語りて川広し

秋風を器用に捌く川鶴かな

復活の舌に辛口カレパツ

瓢の実を振る元芦屋マダムかな

突然に來て秋蝶は風になる

九月五日 六甲会

屋の虫稲畑邸は今日も留守

虫の音の三楽章はスケルトン

丸の内何時も店のや芋の秋

終電車降りて五キロの虫時雨

芋の露杞陽に会ひし日のことを

九月六日 芦屋ホトギス会

秋扇畳み拝する杞陽の句

風の盆誌齡寿ぐものとして

萩の戸を入れれば京極杞陽展

九月七日 野分会吾屋例会

許されよ無月の下の逢瀬なら

福知山の桔梗本能寺の桔梗

九月七日 虚子記念文学館投句

秋の蚊に三度食はれし館の庭

九月八日 東京大神宮編月祭

緞帳の色は紫無月かな

神の杜無月の黙でありにけり

九月十一日 土筆会

十六夜の見下す衆生鳴動す

大漁の鱈に村の蘇る

組み立てたやうに桔梗の開きけり

その中の桔梗の菓子に句座和む

酔眼にいざよふ月の定まらず

九月十一日 「俳句さく咲く」収録

鈴虫の声の余白を埋める闇

九月十三、十四日 日本伝統俳句協会全国俳句大会

三年を露けく語る一会かな

九月十五日 奇北京俳句大会

奇北忌の花鳥の空でありにけり

九月十六日 北國文芸選考時

秋風の 中句碑と我佇めり

九月十八日 前議員会句会

爽やかに国を支へし人集ふ

虫の音に包まれてゆく帰宅かな

俳詣を生涯糧に獺祭忌

宵闇の 東京駅といふ活気

九月十八日 登高会

生姜市芝にあしあと残せし日

颯風に地震に耐へぬく松林

枝豆や越後の里に抱かれて

生姜市山会はなほ続きをり

九月二十日 ホトギス社句会

鶏頭を挿して正面出来上がる

ビルの窓二十三夜に濡れてをり

九月二十一日 野分会東京例会

漣の立ちの折目正しく萎みゆく

きちかうの朝日カルチャー若草句会

秋の夜はブルゴーニュよりポルドーを

蝸の隙間を縫うてゆく水音

撫子に日の本といふ褥かな

秋の夜の音色に囲まれてをりぬ

蝸の引つ張つてゐる夕日かな

秋の夜や心の隙間埋める曲

撫子や君の怪力見てしまふ

九月二十三日 若水句会

十六夜のスーパームーンてふ憂ひ

杜鵑草子規の供華とて目立たざる

芋を煮て夫の帰宅を待つてでなく

十六夜や父の命日を待つてふ縁

杜鵑草庭の表情変るほど

地平線少し歪めて芋を掘る

十六夜に押されて入る飲み屋かな

九月二十四日 目黒学園句会

露の身を俳誌に賭ける漢かな

鶏頭の髻に消えゆく羽音かな

聖櫃に露けき祈り捧げをり

九月二十七日、二十八日 北信越ホトギス同人会、大会

初紅葉信濃越後を跨ぐ旅

木道の白樺こつんと秋の声

一本の白樺もある秋思かな

ゲレンデも粧ふ山に加はりて

目が慣れてゆく慣れてゆく星月夜

昨夜星と存問したる芒濡れ

カシオペアより星月夜被さり来

九月二十九日 唐澤春城様句集序句

安曇野に縁深めて秋高し

雑詠 廣太郎 選

蟻穴を出てその日から忙しき
 初花や雨のきのふはもう昔
 山笑ふ雲の帽子をちよと斜め
 夫病みて花を見ぬまま終りけり
 亡き夫と春の日分ちゐる窓辺
 喪ごころや牡丹の花は重すぎる
 葉狩土の匂ひの濃きあたり
 薬の日煎じて濁るものばかり
 薬の日主治 医海外旅行中
 花に刻合はせて吉野あるがまま
 神の御手ゆつくり開き花吹雪
 吉野路の残花散るより始まりし
 飛び出して鎮座崩るる蛙かな
 考への閃くときのフリージア
 一徹の白を高々城の春
 おふくろの日本の空へ初燕
 神前の春の寒さにひれ伏しぬ
 牛市に必ず舞ひし雪なりし

相模原 木村享史

同 同

神戸 長山あや

同 同

東京 田丸千種

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

九春の残り数へし雨の音
 神橋として春潮を渡しをり
 船虫の気配さつする迅さかな
 乙訓といひて花菜の咲ける里
 乙訓の牡丹の噂 春惜む
 おほきめに包まれてゐて柏餅
 鳥の巢をかかげて一樹誇らしく
 日ざしより闇を匂ひて沈丁花
 旅終へて旅恋ふ心春惜む
 磐座の名を戴きて石臚
 城遠巻きに後陣の八重桜
 桐の花白雲城へ急ぎけり
 沈丁の香は迷はずにやつて来る
 巢籠のふくらめるだけふくらんで
 ぐんぐんと晴れ子供の日らしくなる
 山生きてゐる山霧の動きけり
 木の椅子に灯火親しむ背中かな
 休日の一 人の時間 昼の虫
 白といふ濃き色に牛乳の初夏
 葉から葉へきらきら初夏を受け渡す
 初夏の日矢真珠筏へ真つ直ぐに
 散る花の富士の白さに加はりぬ
 散る花の中より出でて焼香す
 地球今花に廻つてをりにけり

東京 橋本くに彦

同 同

同 同

神戸 後藤立夫

同 同

同 同

龍ヶ崎 今橋眞理子

同 同

同 同

奈良 古賀しづれ

同 同

同 同

袋井 湖東紀子

同 同

同 同

東京 今井肖子

同 同

同 同

同 同

神戸 立村霜衣

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

雑詠句評（八月号より）

仁義・霜衣・佳乃

一步・純也・さい雪

くに彦・公次・しげ人

雅・廣太郎

我家の具てふもありたるおでんかな

周南 小川龍雄

おでんは、家庭、小料理屋、居酒屋などで味わうことができる。しかし掲句のおでんは、家庭の団欒食としての煮込みおでんであろう。大根、竹輪類、蒟蒻などの具に、我家独特の具も加えてあったので、一層おいしく味わうことができたという。しかし本当は、家庭のあたたかい心遣いが、最もおいしかったのである。家庭のあたたかさをしみじみと感ずる句である。（仁義）

関東と関西でも「おでん」の具は結構違いがある。出汁からして、関東と関西、というより全国的にも違いはあるのではないだろうか。それでももちろんそれぞれの家庭でもオリジナルの具はあ

るのではないだろうか。日本の「食文化に根付いた季節の楽しい姿が、句を通して伝わってくる。（廣太郎）

虚子恋ひの杞陽を恋うて館臈

神戸 千原叡子

京極杞陽についてここでご説明する必要もあるまいが、世が世であれば但馬豊岡一万五千石の当主であった、子爵京極高光公である。昭和十一年、渡欧の虚子先生に出会い、以来一筋に支え続けたのであった。

芦屋の虚子記念文学館において、京極杞陽をテーマとする企画展が行われたのはつい先日のこと。作者は虚子先生も杞陽もよくご存じなのである。展示をご覧になると、様々な場面が甦るのだろう。やがてそれらの思い出はひとつの塊となって、一気に遠退いてゆく。「臈」という季節から、私にはそのように感じられた。（霜衣）

ホトトギスの一時代を築いた大作家京極杞陽は、僭越ながら筆者も何度もお会いした事があり、その素晴らしさに感動した一人ではあるが、作者にとつては師とも仰ぐ存在である。丁度芦屋の虚子記念文学館では「京極杞陽展」が開催されていた時期で、作者の思い出が季節に籠められている。（廣太郎）へ以下略

天地有情

花子選

古曆一枚といふ重さかな 東京 稲畑廣太郎
 三頁目の破られし日記果つ 同
 咲き満ちし梅の香りの七重八重 福山 竹下陶子
 雛壇に余る扇の飾り紐 同
 蔵王堂乗せて棚引く春の雲 長岡 安原 葉
 蔵王堂過ぎれば下り春の風 同
 困りをり血統書付猫の恋 神戸 後藤比奈夫
 花桃を珍客として陋書屋 同
 思ひ出となりつゝ春ば過ぎて行く 東京 今井千鶴子
 惜春の旅戻りなるその人と 同
 ライラック香りて父も母もぬて 同 河野美奇
 香を解き思ひ出ほどきリラの花 同
 蝌蚪の群れ旅立つ勇氣まだ湧かず 宇佐 熊林御堂義昭
 子は未来親は過去乗せ半仙戯 同
 新茶淹れて一と夜語りし亡き夫と 神戸 長山あや
 新茶汲み元気に生きること誓ふ 同
 去年狩行今年は聡子花の客 東京 大久保白村
 長さん病状如何に花の旅 同

壬生踊餓鬼を食ぶとは茹でて食ぶ 神戸 後藤立夫
 桜湯の色は雪洞ともる色 同
 病院に通ふ即ち花人に 熱海 嶋田一步
 花見なき戦中ありて今に生き 同
 首を傾げて春禽となりにけり 熊本 岩岡中正
 いつ果てるともなき戦鳥雲に 同
 藤波のさゆらぎもなき山日和 神戸 三村純也
 母の日や駅に花屋のワゴン出て 同
 夕桜祈りの色となりゆけり 東京 岩村恵子
 これ以上何を望まん花吉野 同
 更衣人は身軽になりたがる 神戸 和田華凜
 石鹼玉きつとあの世は美しき 同
 大き葉に風のころがる露の玉 東京 今井肖子
 ゆるゆると残るみんな眠くなる 同
 残る雪伊吹の鬘を颯にす 吹田 大橋 暁
 浜名湖にサーファー紛ひ居てのどか 同
 終点の駅に始まる桜狩 龍ヶ崎 今橋真理子
 ひとひらもこぼすことなく花の闇 同

弔問

稲畑汀子

私の夫は四十九歳という若さで亡くなった。三十三回忌までは、毎月墓参を欠かした事はなかった。月命日の九日前後になると、満池谷の墓地へ車を走らせる。墓地の入り口にあるお花屋さんともすっかりお馴染みになって、夫の墓前に飾る対の花を調べて貰い、同時に少し小さい花束を作って貰って両親と義兄一家、十歳で亡くなった次兄のお墓へもお参りを欠かさなかった。昨年・三十三回忌を終えて、もうこれで、一年に一度だけ行くことにしようと決めた。初めは気になっていたが、すっかり足が遠のいていった。何となく忙ししいことが口実にもなっていた。

昔・私が二十年間・中学生に俳句を教えに行っていた甲南学園の父兄にも俳句会が出来て、今は本郷桂子さんと田中祥子さんが世話をされ、「紅梅会」としてずっと続いている。俳句に興味が出来た方達は他の会にも参加されるようになり、俳人としての活躍も目ざましい。若かったご父兄にも歳月が経った。

ロイヤル俳壇に來られていた宮地さんの欠席が気になっていたのであるが、間もなく彼女の訃報が届いた。

「私は宮地ですが、母が亡くなりました。身内で全て済ませたの

ですが、遺体に乗せた車で虚子記念文学館をひと巡りさせて頂きました。母はとても俳句に親しんで居りました。先生のご在宅の時に一度ご挨拶に伺いたいと思いますが」

四人の息子さんの内の次男の松木さんから電話を頂いた。

「まあ、亡くなられたのですか。良くなるのを心待ちにして居りましたのに」

「はい、何とか父もお伺いしてと申して居ります。でも、余り体調がよくないので……」

「私の時間が取れる時にお参りさせて頂きましょう。お宅の場所をお教え頂けますか」

「そうして頂けると父も喜びます。母も喜ぶでしょう。場所が難しいので、私が車で先導致します」

やがて、我が家のFAXに地図とメッセージが届いた。

待ち合わせ場所が満池谷となっている。夫の墓地のある場所ならよく分かる。長くお墓にお参りしていないのが気になっていた私は、約束の時間より一時間ほど余裕を見て家を出た。行き慣れた道である。

入り口の花屋に一步踏み込むと声がかかった。

「先生、お久しぶりですね」

「気になりながら、忙しくて……」

「朝日俳壇をいつも見て、お元気で忙しいのだと思っ
ていました」

手早く花を調べて貰うと、夫の墓地へ車を走らせた。亡くな
った宮地玲子さんの優しい笑顔が先導して下さっているようだ。

約束の場所には桂子さんたちがすでに待つて居られた。約束の
十時には、さっと黒い車が現れた。玲子さんと同じ笑顔の男性が
にこにこしながら車から降りて来られた。

「松木さんですか？」

「はい、早速ですがご案内しましょう。二通りの道があるので
が、後へついて来て下さいませるか」

車は間もなく線路を越えたと山道にかかった。この辺りはまだ
まだ桜が美しい。玲子さんはこんな山道を来られていたのだと驚
くほど、上へと登ってきた。車を門に入れると、急な階段を降り
て玄関の中へ招じられた。

日本間の祭壇の前に座り、句帳を持つてにこやかに佇むにこや
かな玲子さんの御遺影に頭を下げた。

「玲子の部屋はまだ一切手を入れて居りません。俳句に関するも
のが沢山あるのです」

確か大学の教授を退官されたと伺っていたご主人は、時々涙を
拭いながら説明をして下さった。祭壇の横の障子を開けると、さ

つと明るい光が差し込んだ。

「この庭は玲子が石の一つから全て調べて作った庭です」

大きな枝垂桜、芒叢から萌え出た新芽、奥行きのある庭の配置
に彼女の心が宿っているように見えた。

「いいお庭ですねえ」

「私たち、ここで度々俳句会をさせて頂きました」

祥子さんが話をされると、ご主人が頷かれる。洋間に席を移し
て思い出話に時を過ごした。四男の奥様が甲斐甲斐しくご接待下
さっている。

帰路は再び松木さんの先導で山道を下り、お別れした。

ふっと、心の荷が軽くなっているのに気がついた。

「たまには、俺の墓参も忘れんといて」

夫が耳の奥で言ってるのが聞こえて来た。

